

## 「止められなかった」復旧工事 人住まぬ地、71億円の橋は誰の

朝日新聞 2023年3月2日 配信

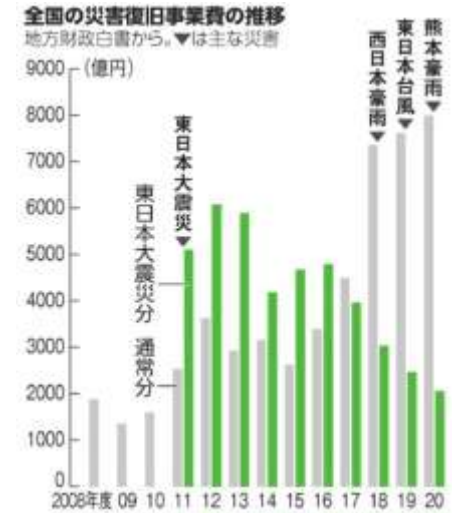
人家が途切れて5キロほど、冬枯れの農地が広がる道を行く。こつぜん、長大なコンクリートの壁と大きくアーチを描く橋が現れる。橋を渡った先にも、もう人は住んでいない。道路はそこで行き止まりだ。いったい誰のための橋なのだろう。

「あくまで壊れたものを元に戻す、原形復旧」宮城県石巻市大川地区。12年前の震災で壊れた尾の崎橋の災害復旧工事が、この春、やっと終わる。汽水湖である長面(ながつら)浦の兩岸、長面と尾の崎の二つの集落跡を結ぶ県道の橋だ。一帯は震災後、災害危険区域になっている。新しい橋は高架構造で架け替えられた。手前の長面側に震災前よりはるかに高い8.4mの防潮堤がつくられ、それを越えるためだ。橋の全長は旧橋の56mから180mに延び、さらに300mの取り付け道路を通すため、山が大きく削られた。総工事費71億円。工事にあった県東部土木事務所は「防潮堤を越える必要があっただけで、豪華につくりなおしたわけではない。あくまで壊れたものを元に戻す『原形復旧』だ」と説明する。橋はすでに通行できる。渡る人たちを待った。

東日本大震災から12年。復旧・復興工事はほぼ終わり、新しい風景の中での人々の営みも始まっています。大きな被害があった宮城県石巻市を記者が歩き、復興のあり方について考えました。

長面浦はカキ養殖で知られ、いまは約20キロ離れた集団移転先から、漁師たちが通う。一部の人は橋を渡って、尾の崎に残った元自宅や作業場を使う。刺し網漁に携わる神山正和さん(73)は「橋は必要だが、こんな立派にしてもらわなくてもよかった」と苦笑する。カキ養殖のリーダー、小川英樹さん(41)は「クレーンを立てたまま船で橋の下をくぐるのはありがたい。でも、漁師からすれば高い防潮堤はいらない。何百億もかけた復興だが、必ずしも俺たちのことを考えていない」と話した。ふだん橋を使うのは神山さんら漁師10軒ほど。ただ週末などにはふるさとを懐かしむ元住民や、墓参りの人もやって来る。

走りだした復旧「止めたくとも、止められなかった」大川地区は、津波の被害が最も大きかった場所の一つだ。地盤沈下で広い範囲が水に沈み、犠牲者も多かった。約1200人が住んでいた東半分の3集落が、災害危険区域となり姿を消した。地区の復旧・復興事業は大がかりになり、年数もかかった。大量の土を埋め戻し、浸水した約400haの田んぼを復活。壊れた防潮堤は数十年から百数十年に一度の津波に耐えられるようにと、一部を除きかさ上げされて復旧し、農地を囲む。無人の集落を結ぶ長大な橋もできた。投じられた各事業費を足し合わせると、ざっと800億円以上。「災後」の風景はどうにもちぐはぐだ。「止めたくとも、止められなかった」この地区の復興についてそう話すのは誰だろう、岡本全勝(まさかつ)・元復興庁事務次官(68)だ。政府で復興事業の指揮をとってきた。2012年の復興庁の発足後、岡本さんは何度も現地を訪れ、疑問を持った。「米余りの時代に大がかりに農地を戻すのは、ムダではないか。ほかの方法はないのか」。農林水産省の職員に尋ねたという。だが、農地も防潮堤も道路も、すでに復旧は走りだしていた。災害復旧事業は壊れた公共土木施設や農業施設を確実にもとに戻すため、国が自治体に手厚い財政支援をする。災害後ただちに所管省庁の出先機関が現地で査定に入り、迅速な復旧をめざす。新規事業とは違い、「費用対効果」は問われない。復興庁が所管する復興交付金とは別制度のため、調整も難しかった。「それぞれの役所が、いったん走り出すと止まらない。だが住む人がいなくなってしまう場所で、その仕組みでよかったのか。『部分最適』が結局『全体不最適』になってしまった」住民たちは賛成したのだろうか。「我々は暮らし再建のことで精いっぱい、正解を探す余裕はなかった。行政は説明会で計画を示し、そのまま動くだけだった」。当時の尾の崎集落の自治会長で、現



在は市内の別の場所に住む濱畑吉文さん(73)は振り返る。そうした証言はほかにも聞いた。震災から12年。生産の営みは始まっている。元住民の多くが農業から離れる中で、復旧した広大な田んぼを農業法人などが引き受け、大規模営農を進めてきた。「田んぼを沈んだままにする選択もあった。でも、ふるさとをなくしてはだめだべ、と。そのために堤防を直し、農地を復旧した。我々には必要だったんだ」と農業会社を経営する大槻幹夫さん(80)。「復興が過大だ」「ムダだった」と簡単に言いきれぬのか。私は答えを見つけれないでいる。

「まちが縮小、元の大きさを復旧してよいのか」これからのに向けた教訓はあるだろうか。壊れた公共インフラを、国の負担でいち早く元通りに戻す。災害復旧制度は、長く国土のメンテナンスを担い、地域社会の安全を支えてきたと言える。だが、人口減が始まった日本で、この仕組みに矛盾が生じてはいないか。近年は毎年のように豪雨災害が発生し、災害復旧の総額も膨らんでいる。地方自治体の政策を担う総務省の元官僚でもある岡本さんは「まちが縮小するとき、各種施設を元の大きさを復旧してよいのか。費用対効果を検討してはどうか。各施設をバラバラに復旧するのではなく、将来どんな地域にするか面的な検討も必要だ」と提案する。(編集委員・石橋英昭)

### 3.11 震災・復興 第2回

## 限界集落、みこし担ぐ異国の若者 人減る被災地の「生き残る道」

朝日新聞 2023年3月3日 配信

太平洋に突きだした宮城県石巻市・牡鹿半島の沖合には、世界屈指とされる漁場が広がる。半島の先に、鮎川浜という集落がある。集落唯一のミニスーパーに併設されたイトインスペースで、若者たちが集まっていた。お菓子を食べ、早口のおしゃべりに興じる。なんだか、街中で見かける高校生のようだ。彼らが話すのは異郷の言葉。人口660人ほどの浜に今、インドネシア人約40人が暮らす。技能実習生や特定技能外国人として漁船に乗っている。仕事終わりに5人、10人どこかに集まる。給料日は必ず。仲間うちで「パーティー」と呼ぶそうだ。

高齢化率5割超「日本人だけでみこしを担げない」待ち合わせをしていたアルディ・ワンディさん(23)が笑顔で私を迎え入れてくれた。気になっていた写真があった。アルディさんに案内してもらい、歩いて15分ほどの高台にある熊野神社に向かった。東日本大震災から12年。復旧・復興工事はほぼ終わり、新しい風景の中での人々の営みも始まっています。大きな被害があった宮城県石巻市を記者が歩き、復興のあり方について考えました。神社のお祭りを紹介する冊子に、みこしを担ぐアルディさんたちの写真が載っていたのだ。聞けば、みこしの担ぎ手はいまインドネシアの若者たちが中心になっているという。最近ではコロナ禍で中止だが、「重かったけど、楽しかった」。鮎川浜を含む牡鹿地区は12年前の東日本大震災の後、人口が約4500人から2千人へと激減した。若い世代の流出が激しく、高齢化率は5割超だ。半島にある6校の小中学校のうち、この春に2校が閉校する。神社の安藤秀徳宮司(72)は「日本人だけではみこしを担げなくなりました」と言う。祭りを再開した7年前から、水産会社を通して助っ人を頼んでいる。鮎川浜以外にも実習生はいて、復興事業でできた高台団地には彼らの寮も立つ。限界集落へと突き進む災後の半島に、異国の若者がすっかり溶け込んでいた。

「彼らがいるから安定して船が出せる」実習生らの1日に密着しようと、16人を受け入れている水産会社「山根漁業部」の定置網漁に同行させてもらった。午前5時出航。2月中旬のこの日は波が高く、たちまち船酔いに見舞われる。来日5年目のプラナ・フィルナギスさん(25)が「大丈夫ですか？(波は)昨日は小さかったのに」と声をかけてくれた。揺れる甲板を走り回る姿は、ベテラン漁師の風格だ。「わらわら(急いで)氷かけてけろー！」この地の方言が船上を飛び交う。



熊野神社のお祭りでは、インドネシアの技能実習生たちが中心となってみこしを担いだ=2019年、宮城県石巻市、大沢泰紀さん提供



「インドネシアで勉強した日本語と違って、大変です」とプラナさんは苦笑した。海中に仕掛けた網を機械で巻き上げると、何万匹ものイワシが姿を現した。クレーンを操作するのは日本人の船員。力仕事を任されるのは、もっぱら若い実習生だ。船から身を乗り出し、イワシと一緒に網に入っているタラやスズキを鉤(かぎ)で捕まえ、甲板に揚げた魚にシャベルで氷をかける。気温は零下2度。海水を浴びながら、黙々と作業を続けていた。市は漁業者の高齢化やなり手不足を解消するため、2007年にインドネシアの西ジャワ州と協定を結び、実習生の受け入れを始めた。山根漁業部で働いていた5人の実習生は震災を機に帰国。漁船7隻のうち6隻が壊れ、約1年かけて修理や新造を進めたが、きつい仕事に就く日本の若者は少ない。がれきがまだ残る12年、中断していた実習生の受け入れを再開した。



大量のイワシが取れ、インドネシアの実習生たちが忙しそうに働いていた=2023年2月14日、宮城県石巻市

**インドネシアに「家庭訪問」 半島の付け根にモスク建設** 「彼らがいるから安定して船が出せる。復興を支えてもらっているというよりチームの一員だ」と、漁労長の山根睦寛さん(54)。インドネシアの若者たちからは「パパさん」と呼ばれている。ただ、市内での受け入れが初めからうまくいったわけではない。受け入れ開始直後には、ゴミの捨て方や時間を守るといった生活習慣の違いから、船主との関係が険悪になり、途中で帰国するケースもあった。震災後、漁業や水産加工業の復興を目指す中で、三陸沿岸部では外国人労働者が頼りだ。相互理解を深めようと、石巻の漁師たちは独自の取り組みを始めた。船主たちは毎年、インドネシアに行って若者たちの親元を訪ねるようになった。「家庭訪問」で子どもを送り出す親に安心してもらうためだ。石巻での暮らしをサポートするNPO法人も立ち上げた。女性スタッフ3人が実習生の相談に応じ、船主たちに接し方を伝える。「スキンシップでも頭を触るのはNG」「怒鳴ってはだめ」。実習生から「マミー」と慕われている。さらに、漁師の育成につなげようと、13年には現地の子どもたちのための「奨学金」制度を創設。受け入れた実習生の数に応じて船主が資金を出し、現地の子どもを対象に日本語や漁業の資格の塾を開く。

**進む人口減少 「選ばれる」ため環境を整える** 水産関連を中心に市内には約800人の技能実習生・特定技能外国人がいる。11年前の8倍だ。昨夏、半島の付け根にある地区にはモスクが完成した。水産加工場が多く、日本人とイスラム教徒らが協力して建てた。礼拝のある金曜日には、白いドームの建物に、若者たちが自転車で乗りつける。ここでもまた、おしゃべりの花が咲く。人手不足は全国共通の課題だ。劣悪な労働環境はSNSですぐ知れ渡る。「選ばれる」ためにも、大事なのは働きやすい環境を整えること。市の水産課職員として実習生の受け入れに関わり、今も日本語教室を開くなどボランティアで支援を続ける阿部文彦さん(49)によると、他の地域に出た特定技能外国人が居心地の良さを求めて、また石巻に戻ってくることがあるという。「人口減が進む中、外国人との共生が町として生き残る道だ」取材した漁師たちは実習生のことを「自分の子どものようだ」と表現した。復興を支えてもらった感謝もあるのだろう。最大被災地で始まった共生の取り組みは、縮小する日本社会の行く末を考えるヒントになると感じた。(福岡龍一郎)

### 3.11 震災・復興 第3回

## 「津波と付き合う」 浜に建ち始めた新築住宅、海とともに生きる風景

朝日新聞 2023年3月4日 配信

宮城県石巻市の震災遺構門脇小には、東日本大震災の津波と火災の痕跡が残る。そこから100メートルほど海側へ向かった先。「ママチャリ修理 大歓迎」と赤や緑で書いた看板が立つ。2021年5月に市の内陸側から移転してきた自転車店「クマガイサイクル」だ。1台50万円以上的高级品も扱う。周囲は、県が昨年5月に発表した最大級の津波だと「5m以上10m未満」の浸水が想定されるエリアだ。最近、真新しい家がぽつぽつと建ち始めている。代表の熊谷義弘





さん(50)は「地元出身ではない人や若い夫婦も建てている」と言う。目の前の道路は約3.5mの高さに盛り土され、防潮堤を越えた津波に備える。その向こうは災害危険区域だ。このあたりの門脇・南浜地区では500人近くの犠牲者が出て、住宅地は「石巻南浜津波復興祈念公園」になった。多重防御の対策があるものの、不安はないのか。東日本大震災から12年。復旧・復興工事はほぼ終わり、新しい風景の中での人々の営みも始まっています。大きな被害があった宮城県石巻市を記者が歩き、復興のあり方について考えました。

**犬が心配で帰宅 津波で家ごと漂流** 「一番の理由は土地が安かったから」と熊谷さんは言う。内陸部の高速道路近くに比べて、ほぼ半値だった。かつてこの地域で暮らしていた熊谷さんは、震災で九死に一生を得た。揺れの後、飼い犬が心配で海沿いの借家に帰宅。2階の窓から大きな波が目に入り、犬を抱いたまま柱にしがみついた。バリバリ、バリ——。津波に押されて家は激しく揺れ、そのまま漂流し始めた。門脇小の前まで流され、何度か回転した後、旧北上川の中州に乗り上げた。津波がひいた時、中州に立つ石ノ森萬画館に避難して無事だった。当時の恐怖は忘れられない。だが、「震災から12年経って、自分も含めてみんな考えが甘くなってきたな」と苦笑する。「どこでも災害は起きている。逃げるための準備をして割り切ることにした」。いざ大地震が起きたら、近くの日和山に駆け上がるつもりだ。

**バス停の名は「集団地」 その歴史は** 災害のリスクとどう折り合いをつけて暮らせばよいのだろう。ヒントを探ろうと、市の北のはずれ、海沿いの相川地区を訪ねた。「集団地」一風変わった名前のバス停は、漁港から坂道を5分ほど上った古びた住宅街にあった。山を切って谷を埋め、造成した地形がみてとれる。三陸の海と山のはざまにある相川は、何度も津波被害に遭ってきた。1933年の昭和三陸地震津波のあと、浜で家を流された人たちがまとまって移転した場所が、この集団地だ。現在住むのは約30戸。驚いたことに、経験者をご存命だった。元中学校長の中島隆男さん(95)は当時5歳。地震の後、村人が「津波が来る!」と叫ぶのを聞き、母親に背負われ神社の階段を駆けのぼったのを覚えている。直後、集落は水にのまれた。集団移転は当時の村長の判断だった。明治三陸地震津波(1896年)の際、壊れた家屋を再建するため、岩手県から大工の棟梁3人が移り住んだとされる。その子孫が昭和の集団移転でも、測量や土木工事の指揮を担ったという。「次はつらい思いをすまいと、みんなで力を合わせたんだ」と中島さん。そして約80年後。平成の大津波に襲われた。集団地の家々は無事だった。だが実は、年月を経る間に再び海沿いに戻って移り住む人たちもいた。その家々が今回も数十軒流された。家にいた10人ほどが逃げ遅れ、犠牲になった。「しばらく津波は来てねえから」なぜ、また浜に住むようになったのか。その一人を見つけた。ホタテ漁を営んできた阿部護さん(79)。阿部家は父親の代に昭和の津波を経験し、集団地とは別の場所に移転した。阿部さんの代になった1993年、「しばらく津波は来てねえから」と、元の屋敷の場所に家を建



店内で自転車を見せる熊谷さん=2023年2月21日午後2時43分、宮城県石巻市門脇町5丁目



震災後そのままの空き地は多いが、新しい家も増えている。震災遺構・門脇小学校(中央奥)も見える=2023年2月22日午後1時12分、宮城県石巻市門脇町3丁目



高盛り土道路(中央)の向こうが石巻南浜津波復興祈念公園で、手前側には住宅が建ち始めている=2023年2月22日午後1時47分、宮城県石巻市門脇町5丁目



震災前の相川地区。昭和の津波の記憶が薄れ、海沿いに集落ができている=1998年5月、宮城県石巻市北上町、東北地域づくり協会提供



震災3か月後の相川地区。海沿いの家々は津波でほとんど流失したが、昭和の高台移転地「集団地」(中央上)は免れた=2011年6月、宮城県石巻市北上町、東北地域づくり協会提供

とは別の場所に移転した。阿部さんの代になった1993年、「しばらく津波は来てねえから」と、元の屋敷の場所に家を建

てた。「海の仕事だから、毎朝、下りてゆくのが楽じゃなかったのさ」油断したわけではない。昭和の津波でも山際にあった家は被害を免れた。だから大工に頼み、その家と同じ高さに盛り土をして建てたのだ。「防潮堤もあったし、これだけ土台を上げたんだから、次に津波が来ても大丈夫だと思った」だが平成の津波は、昭和を大きく上回った。阿部さんは、小学校わきの山道を上って避難し、自宅が引き波に持ってゆかれるのを、ぼうぜんとしているしかなかった。相川の人たちは、また話し合った。「やっぱり高台移転しかねえ」昭和の集団地に隣接する2カ所を造成した。漁業に見切りをつけ、相川を出て行った家族も少なくなかったが、計十数戸が「平成の集団地」に移った。阿部さんも5年前、ようやく新居に落ち着いた。

**淡々と受け止める住民** 相川の人たちに話を聞いてまわる中で、気づいたことがある。被災を繰り返していることを淡々と受け止めているように見えたのだ。「三陸沿岸は昔から海に生かされてきた。津波と付き合わざるをえないのさ」と、自治会長の鈴木学さん(78)は言う。一方で、住民には皆、津波への心構えはしみついているようだ。阿部さんの妻みつゑさん(76)は「小さい頃から津波はこわいんだって教えられてきた。大きな揺れが来たら、金目のものだけ持って、とにかく高い所へ逃げろってね」。相川のすぐ近くの浜には、昭和の津波の後に置かれた石碑が残されている。こう刻まれている。「地震があつたら 津浪の用心」(原篤司、編集委員・石橋英昭)



昭和の津波の後、三陸各地に建てられた「地震があつたら 津浪の用心」の碑  
=2022年12月、宮城県石巻市北上町